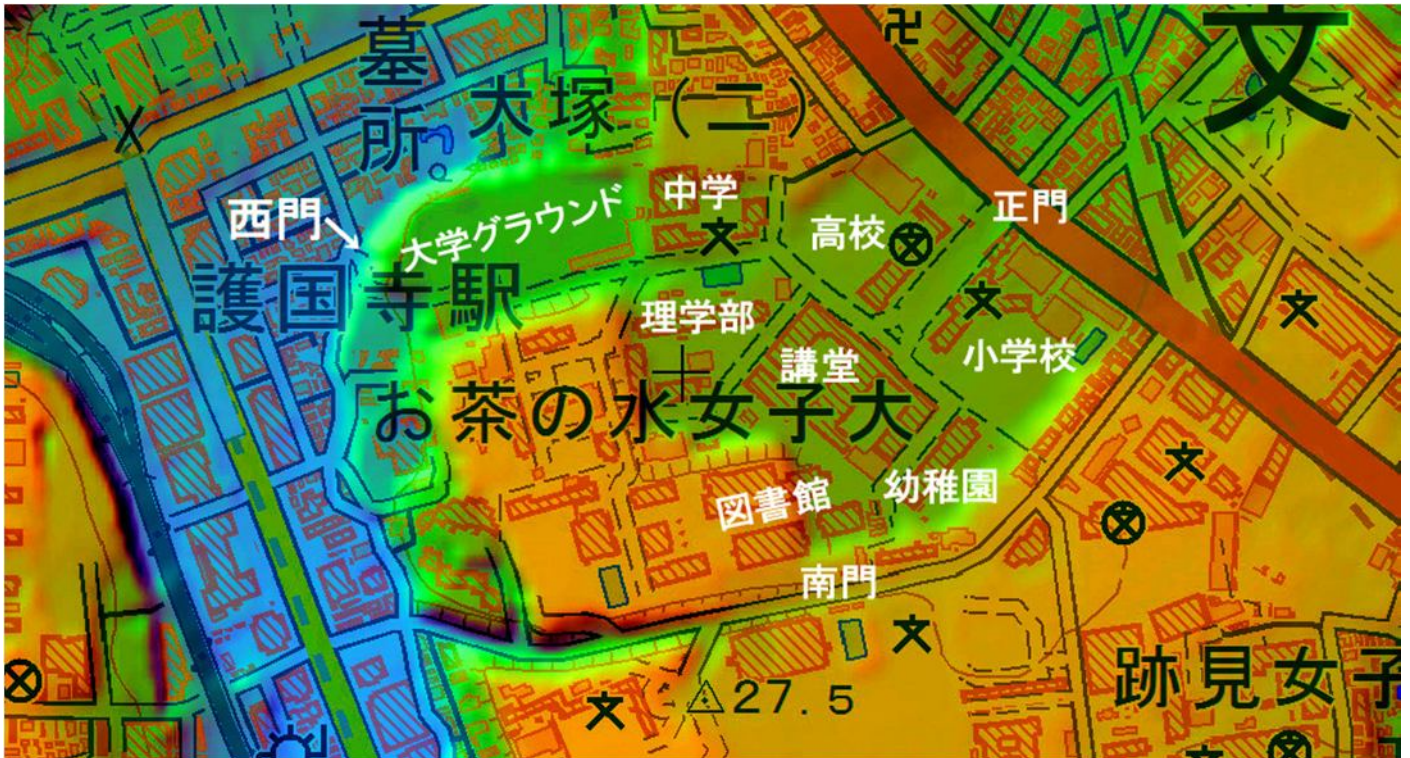


## 「大学構内の地形 (1)」

本校は、文京区大塚のお茶の水女子大学構内にあります。お茶の水女子大学は、武蔵野台地の東のはずれ、音羽低地と小石川低地に流れていた、神田川の支流による浸食を免れた、舌状台地（小石川・目白台地）上にあります。しかし、大学構内の地形は平坦ではなく、坂や階段が何か所もあります。つまり、台地上に更に段差のあり地形なのです。そのことは、立体色別標高図を作成してみると、よくわかります。



「お茶の水女子大学付近の立体色別標高図」 作図 ; C. Tanaka

標高によって、立体感と色を強調しています。水色が標高 15 メートル以下、黄緑が標高 15~25 メートル、橙が標高 25 メートル以上です。大学の南側にある筑波大学附属中・高の敷地内の三角点の標高が 27.5 メートルです。護国寺駅付近は「音羽低地」で、かつて神田川の支流が流れていました。その川は護国寺交差点で二手に分かれ、上流は坂下通り方面と、池袋方面にさかのぼっていました。

この地図は標高による立体感と色を強調しているのので、地形の凹凸が非常によくわかります。お茶の水女子大学構内は3つの高さの平面で構成されているとわかります。一番高いのは、大学の校舎が並ぶ橙色の地域。その下の段が、附属学校や講堂、理学部、大学グラウンドがある黄緑の地域。附属図書館や生協は段差上にあり、「2階」が入口になっています。まず最下段が大学グラウンド西側の坂を下った西門付近です（ここにはかつて井戸がありました）。

古い地形図を見ると、もっと段差を表現する等高線が丸みを帯びていて、自然な地形です。この色別地図を見ると、人工的とも思える段差になっています。昔ここは陸軍の施設(陸軍病馬厩分厩)だったので、自然の地形に人の手が加わっているのでしょう。



「明治時代のお茶の水女子大学付近の地形図」（明治14年測量図）

前ページの地図と同じ範囲です。等高線がよくわかり、人工的な地形は見当たりません。桑畑の記号が多く、当時はこのあたりでも養蚕が盛んであったこともわかります。

実際に大学構内を歩いてみると、標高差のある場所は坂や階段になっています。そういう場所の土が完全に露出していれば、それが自然の地形（段丘崖）であれ、人工的な崖であれ、地層の層序が観察できる可能性があるわけです。私は6年理科を一緒に担当している同僚の理科教員と相談して、まずは、6年生に大学構内の地形をよく観察させることにしました。その様子は、次回に紹介したいと思います。

（お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋）